

唐津の名の起こり（1/2）

～「松浦・唐津地名考」～

この「唐津」は、3世紀の弥生時代に、「末盧国」として『魏志倭人伝』に記されることが初見である。ここでは土地名を「まつろ」とするが、8世紀に編纂され『古事記』や『日本書紀』、『肥前国風土記』では、神功皇后の新羅征討説話と関連づけて「梅豆羅国(めずらのくに)」とし、その後に訛って「松浦」という地名となったとしている。

「松浦」は、現在は「まつうら」と読むが、『万葉集』（8世紀）では「麻通羅(まつら)」や「麻都良(まつら)」とし、当時は「まつら」と呼ばれていたことがわかる。この「松浦」には、大陸との交通や防備の要として、「松浦郡」が置かれていた。上記の神功皇后説話に見る地名の成立は、8世紀の記紀等の編纂段階で創出されたこじつけ的な意味合いが強く、『魏志倭人伝』でも記されるように「まつろ・まつら」的な地名はすでに存在しており、その後、遅くとも記紀等が成立した8世紀前半までにそうした読みで「松浦」の字が地名の固有名詞としてあてられ、「松浦」の地名となったと考えられる。

一方、「唐津」の地名は決して古いものではない。記紀等の記載からも、現在の唐津市鏡付近が、6世紀段階には朝鮮半島への渡海拠点となっていたことは想定できるが、そこには「唐津」の表記は確認できない。その後、8世紀前半の遣新羅使の歌が所収され『万葉集』では、筑前国の「韓亭」・「引津亭」を経て、肥前国松浦郡の「狛島亭」に停泊し、ここから吉岐へと渡っている。この「狛島」は、現在の唐津市の「神集島」であり、この「神集島(柏島)」は、奈良・平安期を通じて、日本だけに限らず、中国からも日本の重要な渡海・着岸拠点と認識されていたが（『頭陀親王入唐略記』・『本朝紀』・『小右記』等）、「唐津」という表記はない。11世紀後半になり、大宰府の安楽寺の荘園の1つに「辛津荘(からつのしょう)」という記載が見られるのが「唐津」の地名の初見だが（『安楽寺文書』）、継続はせず、一時的な地名表記として文献からも消えていった。

～2/2へつづく～

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など

◎引用・参考文献（出典）

◆『西日本文化』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsucity.jp/hp/cnts_lib/index.html

	分野	歴史
	地域	全域
<h2 style="text-align: center;">唐津の名の起こり（2/2）</h2> <p style="text-align: center;">～「松浦・唐津地名考」～</p>	◎地図・写真・統計資料など	
<p>～1/2からつづく～</p> <p>中世段階になっても、在地武士の中に「唐津」の名を冠する武将が一人もいないことから、この「唐津」の地名の成立は、村に付随するものではないことがわかる。こうしたことから、「唐津」という地名の成立とその時期について次のようなことが推定できる。</p> <p>「唐津」の表記が11世紀後半になりようやく確認できることや、この11世紀後半から12世紀には宋人を中心とした居留地である「唐坊」が博多でも形成されていることを考察した最近の研究動向等から勘案しても、この「唐津」の地名は、11世紀後半以前に、「神集島」及び対岸の「唐坊」（唐津市湊）が、1つの大きな中国人居留地並びに重要渡海拠点としての形を形成していたことにより、「唐人津（とうじんのつ）」的な「施設」を呼称する意味合いが、「唐津」と呼称されるようになったと推定される。</p> <p>この「唐津」という地名が施設的な呼称から、「松浦」に代わる地名的な呼称へと転化するの、後の15、16世紀になってからのことである。</p>	◎引用・参考文献（出典）	
<p>◎エピソード・伝承・うんちく など</p> <p>韓国に「唐津（タジン）」という地名がある。</p>	<p>◎もっと詳しく知りたい方は</p> <p><u>唐津市近代図書館</u>へ お問い合わせください。</p> <p>■電話：0955-72-3467</p> <p>■ホームページ： http://tosyokan.karatsucity.jp/hp/cnts_lib/index.html</p>	